

# いなごませくす

艦〇すの出産記録 Vol.2



なないろしめじ



午前の任務を終え昼食後、一息ついた僕と電は、  
執務室に戻っていた。

未明からの突発対応の仕事もあつて疲れていたのか  
いつの間にか電はソファアールで仮眠をしていた。

…が、私のアングルから  
電の眩しい太ももとパンツが丸見えとなっていた。  
ちよつと警戒心がなざすぎだぞ、電。





電(のふとももとパンツ)を凝視していたのに気づいたのが  
電が目を覚まして「ちらを見つめ返した。」

電「……「めんなさいですー」  
ちよつと疲れちゃって」

僕「いいんだよ。午前から激務だったからね」





こちらの視線を察して、電が優しい微笑みを返す。

電「「うん」と「うん、」無沙汰だったので  
久しぶりだ「したい」のです。」

お…お昼から…？ーと思いつつ  
僕は電の傍らに座った。





電「……」なぞらなぞるか？」

電といたすために  
まずソファアアの上で電の脚を開かせる。

ケツコンシた関係とはいえ、  
まだそんなに経験のない電は  
多少不安げにこちらを見つめ返す。

長い脚が開いて  
ペパーミントグリーンの  
パンツが大きく覗く。





軽くキスと愛撫をしてお互いの気持ちを高ぶらせた後、  
パンツを脱がそうとすると、電はそれを拒んだ。

電「じ…自分で脱ぐのです」

電は赤面しつつ自らパンツを脱ぎ、  
無毛の股間を僕の前にさらけ出す。

電の小さな蕾はすでに  
花びらの隙間から甘い蜜を  
滲ませはじめていた。





我慢できなくなった僕はおもむろに

電の下腹部の花びらの蜜を舐め始める。

電「汚いのですーそれと…  
すごく…恥ずかしい…のです…」

僕「汚くないよ。

恥ずかしかつてる電もかわいいう」

舐めても舐めても次から次へと溢れ出す花の蜜を、  
はちみつを採取するミツバチのごとく僕は貪り続けた。





夢中で花の蜜を貪り続けている中、  
電は気持ちが悪くなっていたらしく

視線が宙を向いて意識が  
あちらの世界に旅立ちつつある感じになってきていた。

電「な…何が、変な…気持ち…なのです…」







ビクッ ビクッ

ブニャッ アアア



脳内を快樂物質に支配された電は、  
急に体をビクつかせて、そして大きくのけぞった。

ビクッ ビクッ

電「いく…の…です…いく…イグツツツツ」



言うやいなや、

股間から今まで出したことのない大量の潮を吹かせる。

虚を突いた形で僕の顔に大量に潮を吹き付けたが、  
僕にとってはご褒美なのでそのシャワーをありがたく顔に受けた。





ひと通り電の蕾をなめてあげた後は、電は申し訳無さそうに僕の股間をなめてくれた。

電「電を気持ちよくさせてくれたので…そのお礼です。気持ちいいですか…？」

ペロ

ペロ

ペロ

電が男の竿をなめるさまは、さながら子犬がミルクをなめるような愛おしさがあつた。





ピチャ...

へろ

ピチャ

夢中で、たどたどしくも全身で一生懸命に奉仕してくれる電はそれだけでも愛おしい。

ぴちゃ

ペロ

ぴちゃ...

ケツコンした秘書艦とはいえ、ここまでしてくれると多少申し訳なくもなる。  
電は、この僕が幸せにしなければ。







ドキ  
ドキ..



僕「そろそろ合体したいけど、いいー？」

電「はい、お願いなのです」

ドキ  
ドキ..

電を執務デスクの椅子に合い向かいに跨がらせる。







僕「挿れるよ」

電は黙ってこくりと頷き、僕の大きく怒張したモノを自分の膣内(なか)に受け入れる。  
初めての時はキツかったけど、何度かしているうちに  
電の股間は僕のペニスの形を覚え込んだようだ。

ヌポポ...

うっ...

挿入時の多少の抵抗感がありつつも僕のモノは電の中に全て飲み込まれ、  
僕と電の股間は文字通り隙間なくぴったりと「結合」した。





はッ

はッ

ギン

はッ

ドッ ツ

ギン

ギン



この体勢だと電の足元がつま先立ちなので、僕が腰を上下に振ってる。

電は苦しそうな顔をしつつも何とか耐えてくれている。

ギン

ギン

はッ

はッ

はッ

ドクッ

ギン

僕「このポーズ大丈夫…？ 辛くない…？」

電「大丈夫…なのです。司令官さん もっと動いて大丈夫…なのです」

久しぶりの電との一体感に我慢できなくなった僕は腔内(なか)に発射してしまう。





はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

電「はッ、はッ、はッ…はわ…ッ 電の体が…おかしく…なっ…て しまっの…です！」

激しくピストン運動を繰り返すうちに、電はタガが外れてメスの表情になってきていた。

はッ  
はッ

ギ  
ギ  
ギ  
ギ  
ギ

はッ 電「も…もつと、膣内(なか)に出して…欲しいの…です…！」

メスと化した電を見て僕も興奮してしまい、激しく振る腰を更に激しく上下に振ってしまっ。



はぁ

ああああ

じゅるじゅる



あまりに激しく上下しすぎてしまったからか、結合していたペニスが勢い余って抜けてしまい、抜けた瞬間と射精のタイミングが合ってしまった、思いつき外に出してしまった。

ああああ

はあ

じゅるるる

電「もっと…もっと、欲しいの…です！ 司令官さんの…！」  
僕はさらに欲しがる電の為に椅子に座ったまま体位を変える。







今度は電を背中向きに座らせ、お互いの唇を重ね合わせる。

少しでも電の中に入りたい僕は、電の口の中に自分の舌を絡め挿れる。

電「んツ……！ ちゅ……ちゅ……くちゅ……！」

ちゅっ  
ちゅっ  
ちゅっ

ちゅ

ちゅっ

ビウッ  
ビウッ

最初は戸惑っていた電だったが、僕の舌を受け入れ、

それに答えるかのように自分の舌を絡めてくる。

しばらく二人は、お互いの舌を絡め合いつつも貪りあった。





そのうち電も興奮してきたのか、自分の手を自分の股間に滑り込ませる。  
お互いの脳は快樂でとろけそうな状態になってきていて、  
再び一体になりたい興奮に囚われつつあった。







ちゅっ  
ちゅっ  
ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

くばあ...

電は自らの秘部の門を開き、僕が中に入ってくるのを誘ってきた。  
電「……また挿れてください」

再結合して再び心身とも「一つ」になりたい。  
動物的本能として「僕ら」は一体になりたかった。

くぱあ…









ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

スプ...

電が迎え入れるがままに、  
僕は怒張してやまない自分自身を再び電の中に収め直す。

互いの上と下、2ヶ所が結合されて一体となり、  
あとは行き着くところに行くのみであった。

ヌプ...







電「きょ…気持ちいい… 司令官さん、また激しく動いてください」

電はそうせがむと、電自ら腰を小刻みに動かし始めた。

僕もそのリズムに合わせて、腰を上下に振り始める。









さらなる興奮を求めて僕は、我慢できずに電の服をまくり上げ、小ぶりではあるが形の良い乳房を優しく撫で回したり、乳首をこね回したりする。



電「んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…」  
乳房を愛撫するたび、電は可愛らしくもいらしく囁き声を吐す。





電「そろそろそろそろ…そろそろ電の膣内(なか)に出してください」

電はそう言いつつ自分の手を再び互いの性器が結合した秘部に手を添える。

僕も電の唇、乳房、陰部を刺激しているうちに理性のダムが決壊しそうになってきていた。







ん

んっ

ト

クッ

ゴボ

ゴボ

ゴボッ

僕「うっ…そろそろ…出すよ！」

理性のダムが決壊した僕は同時に大量の射精をし、  
電の膈内(なか)に大量に流し込む。

電もそれを待ち焦がれたかのように半ばメスの顔になった状態でそれを受け入れる。  
僕と電はこの瞬間「一つ」になった。

ド  
クッ  
ゴボ  
ゴボ  
ゴボッ









僕の中から溢れ出す精液はとどまるところを知らず、上下動をしている間に再び結合していた互いの性器が抜けてしまった。

射精の途中に抜けてしまったため、勢い余った精液が外に飛び散ってしまった。

結合していた電の秘部から中出していた精液がゴボゴボとこぼれだす。それでも僕は電が愛おしくてたまらず、しばらくの間電の唇を貪っていた。







ドキ  
ドキ..

ぴり  
ぴり..

お互い性欲の収まらない2人は、続きをするために僕の寝室にやってきた。  
今度は電を四つん這いにさせろ。  
そうすると電の形の良い尻が露わになった。

ドキ  
ドキ..

ヒッ  
ヒッ..

電「この姿勢は初めてなので...  
なので優しくしてください」

正常位もいいが、後背位も下半身を独占している感じが好きで  
僕の下半身は再び怒張してきた。





は、  
は、

2

と、

僕は服を脱ぎ、電の後ろにつく。

は、  
は、

まずはいきなり入れずに焦らすように  
自分のペニスを電の小陰唇にこすりつける。

と、

電「あッ……んッ……んく……ッー」

あ

クリトリスを指で軽く叩いたり、  
優しくこすりついたりして電を気持ちよくさせていく。







ん

ん  
ん

ん...

そうしているうちに電の方から痺れを切らした為か、  
「早く…早く挿れてください」と急かされた。

んっ…

希望通り電の下半身の肉の門を開き、  
自分の肉棒を奥へ…奥へとゆっくりとねじ込んでいく。

るんっ

ぬ

挿入箇所が見えない電は不安と性的興奮が一緒くたになって「んっんっんっ」  
「んっんっんっ」も喘ぎ声を漏らしていた。





最初はゆっくり出し入れしていたが、僕は途中で我慢できず急に激しく腰を降り出す。

電「……ひあッ……」

僕の股間と電の尻が激しくぶつかりあってパンパンと大きな音が出る。

後ろの状態が見えない電にとっては急なことでびっくりしたことだろう。そんなこともお構いなく、本能に従って僕は激しく腰を振り続ける。







電の膣内の締めまり具合は極上で、程よく締め付けて男の精を絞り出すメスの能力を十二分に発揮しつつあった。

膣壁が侵入してきたオスの肉棒の形を覚え、肉棒が滑りやすくなるための粘液を分泌させ、程よく締め付けをして射精をさせやすくさせる。

動物のメスが長い間に培ってきた子孫を残すための知恵だ。それが電の体の中にもあった。

互いが互いを刺激させ、子孫を残す行為の最終地点に到達しつつあった。



my  
dog



ゴッ  
クッ

はッ  
はッ  
はッ

びゅん  
びゅん

ボタッ  
ボタッ

僕「電…そろそろ、イクよー!」

はッ  
はッ  
はッ

電「はい、来てくださー…ッ

「あああああああー!」

びゅっ  
びゅっ

びゅっ

っ  
ボタッ  
ボタッ



そう言うやいなや、僕と電は一緒にオーガズムに達し、自分の体の奥から電の奥に向けて大量の「想い」を流し込む。





クッ

ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル

ぶっ

っ

ぶっ  
ぶっ  
ぶっ

ボッ  
ボッ

電の中に妊娠不可避な量の大量の射精した後、  
抜いても興奮が止まらず電の尻に大量の精子をぶちまける。

電の下半身を独占する優越感。

ふっ  
うっ！

ボタッ  
ボタッ

ドク

ユル

ルッ

ルッ  
ルッ

3回目の「合体」をしたあとも、まだ性的興奮は止まらなかつた。  
「こ」まで絶倫なのも電が相手だからこそなのだろうか。









はあ  
はあ:

ボタ  
ボタ

00

□

00

電「今回もいっぱい出したみたいで何よりなのです」

はぁ  
はぁ…

電は公私最高の秘書艦だ。  
多少ドジなところはありますが、思いやりのある良い娘である。  
早く電に子供を産んでもらって育てたかった。  
そして電もいっぱい幸せにしてあげたかった。







キズ

キズ

ぐぐ  
ぐぐ

今日は出来る限り長く電と繋がっていたかった。  
次は電に騎乗位をさせる。  
僕が仰向けになり、電をまたがらせる。

ドキ

ドキ

スレンダーな電の身体がいやらしく反り返った。  
すでに僕の肉棒は電の中に入りたくてうずうずしている。

びび







はあ  
はあ

ぬいっ

電「…挿れますね」

今回は電に僕のモノを握らせ、膣内に挿れさせた。

はあ  
はあ

ぬ  
ふっ

さすがに電も手慣れてきていて、自分の体の一部のように扱って自らの中に入れていく。







はっ

ちゅちゅ

ちゅちゅ

はっ

はっ

はっ

ちゅちゅ

ちゅちゅ

そのまま電に上下してもらい、射精を即してもらおう。

自分から動かずに相手に気持ちよくしてもらおうとのなんと幸せなことか。

ふ、ッ

ん、ッ

くちゅ

くちゅ

電そのものが、僕の抜身である肉棒の「さや」になった感じだ。

電の身体が僕の肉棒を包み込んで、収まるべき所に根本まで収まって

本当の意味での完全な「一つ」となった。

ズン

ズン





アッ

グッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

上下動が激しくなるほどに、僕と電の息遣いは激しくなっていた

電「はあ…はあ… もう、ダメなのです！」

そのまま耐えきれずに再び大量に膣内に射精してしまおう。  
互いの脳髄が繋がったような多幸感を得つつ、  
肉体的にも繋がって一体化した電の中に自分の全てをぶちまけた。







はッ

はッ

はッ

ルルル

ルルル

ルルル

ルルル

フッ  
フッ  
フッ

ボタ

ルルル  
ボタ



互いを激しく求めるあまり、あまりに腰を激しく動かし続けたためか  
再びペニスが電から抜けてしまう。

電「ふあああああああうー!!!」

はッ

はッ

フ  
い  
い  
い  
い

ボ  
タ

ル  
ボ  
タ  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル

はッ

ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル  
ル

勢い余ったペニスがから出し足りない精液が  
あたかも生命を持った蛇のように勢いよく噴き出すのだった。







キド

キド

びびび

びびび

そろそろこちらにも限界が近いと思ったので

最後は電を仰向けに寝かせ正常位で行くことにした。

電「はわわ… 司令官さん、おねがいします」

ドキ

ドキ

そう言っていると電は両足を抱え上げ、股を開き、秘部を露わにした。

電の綺麗な肉ひだがヒクヒクと動き、

オスの肉棒を今か今かと待ちわびていやらしいよだれを垂らし始めていた。

ビクッ  
ビクッ







あ

ん  
ん  
ん  
ん

電の下半身を満足させるべく、僕は怒張した肉棒を電の下の口にくわえ込ませた。

電は「う……う……う……ッ」とうめき声を上げた。

何度も結合を繰り返してきて、電の性器は完全に僕のモノを形を覚えてきたようだった。

ぬ

フッ  
ッ  
ッ  
ッ







はあ

はあ

ニッ

ニッ

電「う…嬉しいのです。司令官さんの体温が直に伝わってくるのです」

はあ

はあ

ニチッ  
ニチッ

僕も下半身の最も感度の高い部分が、電の肉ひだの暖かさに包み込まれてきている。  
これ以上無い至福のひとつである。





電と僕は理性を失った獣のごとく貪るように相手を求め合った。  
僕の方もそろそろ全てを電の膣内(なか)に出し切りたかった。

僕「そろそろ、全部出すよー僕の子供を産んで！」  
電「はい…です、生むのです！全部出して…！」

お互いが快楽の限界に達しつつあった。







ク

はッ

はッ

ユ

ク

ユ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク









はッ  
はッ  
はッ

はッ

ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

ルル

ユ

ル

ルルル  
ルル  
ル

電「もっど……」

もっど出してええええええ……」

普段の「なのです」喋りをしない、飾り立てないメスの「電」がそこだった。

はッ

はッ  
はッ

びくっ

ルルル  
ルルル  
ルルル


ユル

僕から大量の精液を絞り取り、新たな生命を自らの中に宿そうとするメスが、そこだった。  
僕は全ての精を電に放しきった。

びくっ



● REC

HD 1080 60FPS  99%

00:00:23

3...2...1...  ...1...2...3





はあ  
はあ

はあ  
はあ

はあ  
はあ

びく

びく

びく

びく

が

が

000

● REC

HD

1080 60FPS

99%

はあ  
はあ

はあ

はあ

+

びく  
びく

びく

びく

びく  
びく

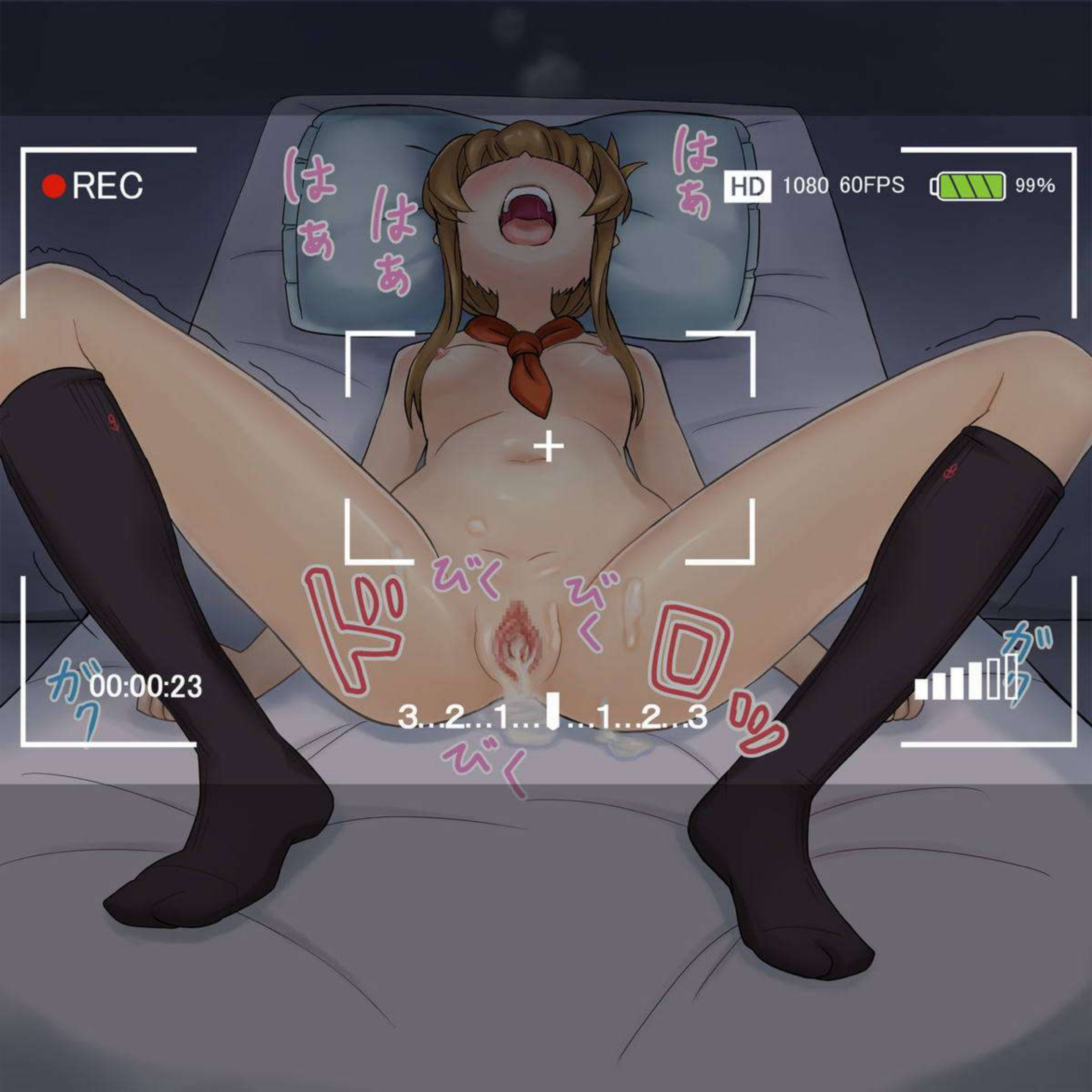
3...2...1... 1...2...3

びく

びく

00:00:23  
が  
が

が  
が





全て「ト」を終わらせ、やっとの思いで地獄からた。

目の前には脱力してだらしなく股を開いて、  
肩で息をしてぐったりしている電がいた。  
これで受精すれば新たな生命が  
この結合した場所から産まれてくるのだ。

はあ

はあ

はあ

びく

びく

ど

びく

びく

ど

が

が



● REC

HD

1080 60FPS



99%

はあ

はあ

はあ

全て「ト」を終わらせ、やっとの地獄から。

目の前には脱力してだらしなく股を開いて、  
肩で息をしてぐったりしている電がいた。  
これで受精すれば新たな生命が  
この結合した場所から産まれてくるのだ。

00:00:23

3...2...1... 1...2...3

ド

びく

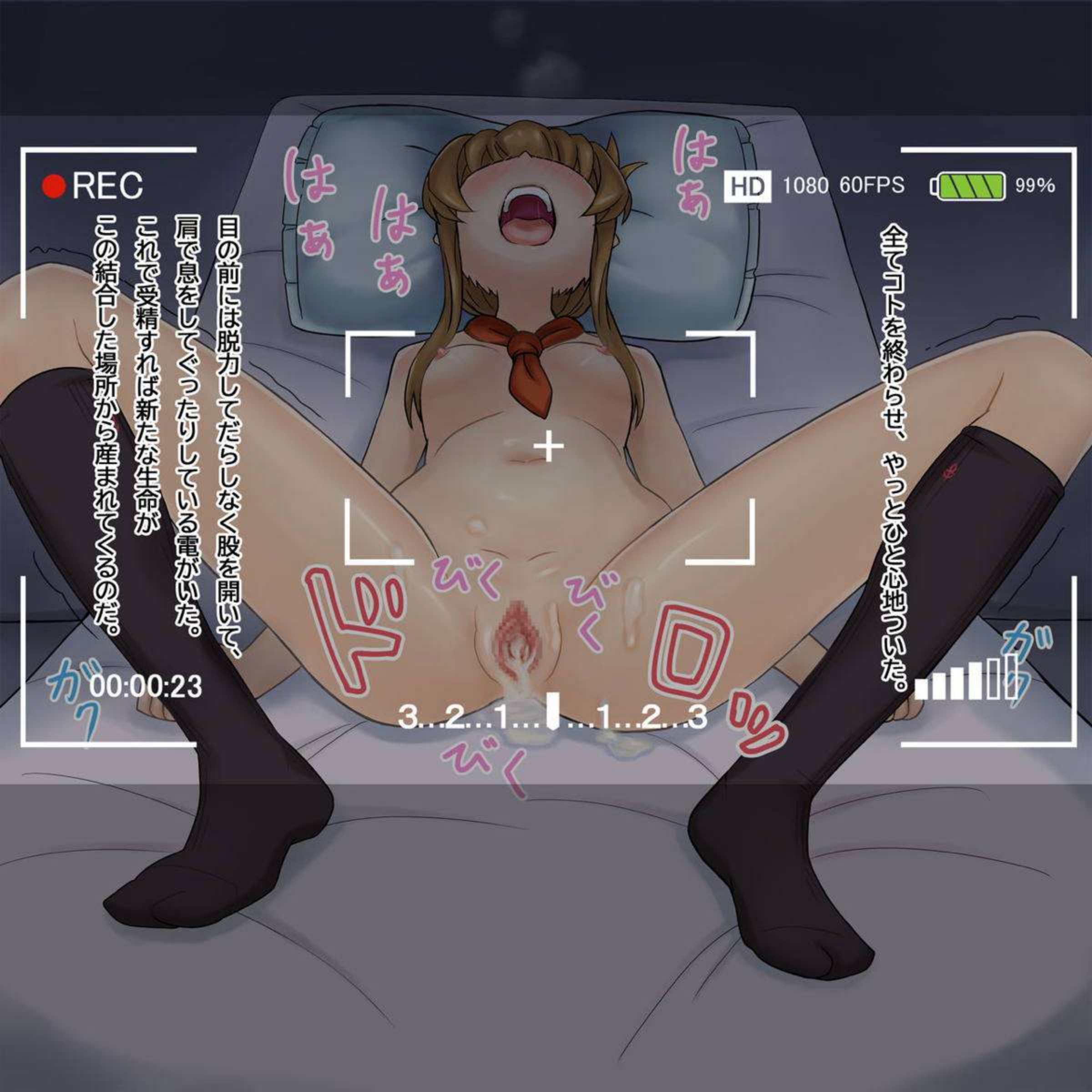
びく

ド

ド

ガ

びく







1ヶ月を過ぎてしばらくした頃、電が僕の所に慌ててやってきた。

電「あの、…あの、……赤ちゃん出来ちゃったみたいです」  
顔を真っ赤にして妊娠検査薬をぼくに見せる。

それは見事に陽性を示していた。

僕の願望が見事に具現化した瞬間だった。

僕「おめでとう、嬉しいよ。ちゃんと育てるからしっかり産んで欲しい」

僕はそれを心から喜び、電をしっかりと抱きしめた。

ドキ

ドキ



電が妊娠して十月十日、  
いよいよ出産の日が近づいてきた。  
軍では艦娘の妊娠・出産過程は  
軍事機密として詳細に記録される。

お腹が大きくなった電は強化ガラスの上に立たされ、  
秘部を開いた状態で撮影される。

電「は…恥ずかしいのです…」

僕以外の研究員もいた為、  
電は顔を真っ赤にしてかなり  
恥ずかしがっていた。



● REC

僕以外の研究員もいた為、  
電は顔を真っ赤にしていた。  
恥ずかしがっていた。

電「は…恥ずかしいのです…」

HD 1080 60FPS  99%

電が妊娠して十月十日、  
いよいよ出産の日が近づいてきた。  
軍では艦娘の妊娠・出産過程は  
軍事機密として詳細に記録される。

お腹が大きくなった電は強化ガラスの上に立たされ、  
秘部を開いた状態で撮影される。

00:00:31

3...2...1...  ...1...2...3





● REC

HD 1080 60FPS  99%



00:00:31



3...2...1...  ...1...2...3



慣れない事ばかりで  
当然のことながら恥ずかしがっていた電だったが、  
僕も傍に寄り添って  
色々安心させる言葉を言っただけだ。

そのうち何かをきっかけに振り切れたのか、  
急に落ち着いた母性の表情を見せ始めたのだった。

電「(ニ)から私と司令官さんの  
子供が産まれてくるのです…」

そうすると電はデータ収集に協力的になり、  
滞りなくデータ収集は終わったのだった。



● REC

そうすると電はデータ収集に協力的になり、滞りなくデータ収集は終わったのだった。

00:02:47

電「(ニ)から私と司令官さんの子供が産まれてくるのです…」

そのうち何かをきっかけに振り切れたのか、急に落ち着いた母性の表情を見せ始めたのだった。

3...2...1...1...2...3

HD 1080 60FPS 99%

慣れない事ばかりで当然のことながら恥ずかしがっていた電だったが、僕も傍に寄り添って色々安心させる言葉を言っただけだ。



● REC

HD 1080 60FPS  99%



00:02:47



3...2...1...  ...1...2...3



● REC

HD 1080 60FPS  99%

00:05:35

3...2...1...  ...1...2...3



そして出産日。

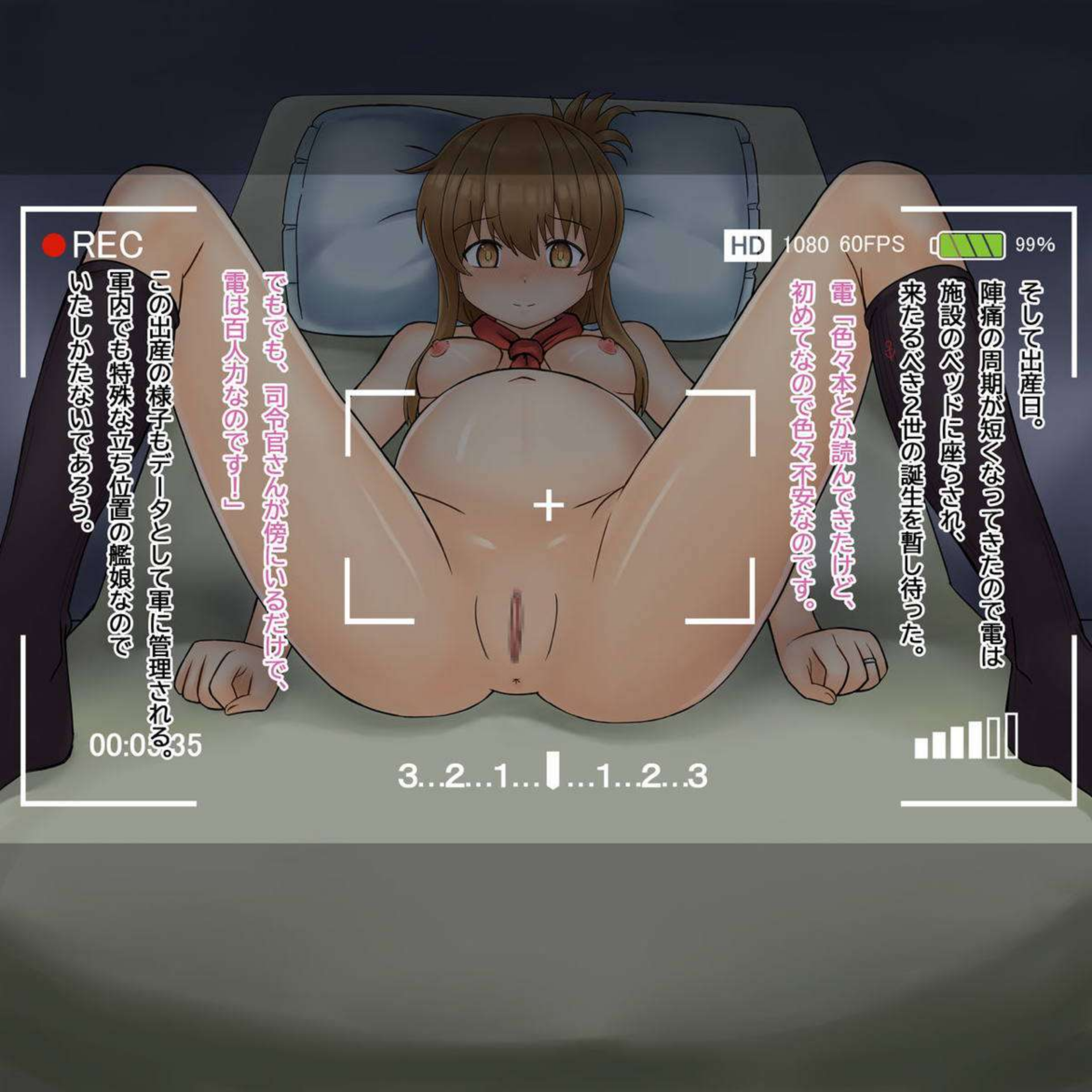
陣痛の周期が短くなってきたので電は施設のベッドに座らせられ、

来たるべき2世の誕生を暫し待った。

電「色々本とか読んできたけど、初めてなので色々不安なのです。

でもでも、司令官さんが傍にいるだけで、電は百人かなのです！」

この出産の様子もデータとして軍に管理される。軍内でも特殊な立ち位置の艦娘なので、いたしかたないであろう。



● REC

HD 1080 60FPS  99%

この出産の様子もデータとして軍に管理される。軍内でも特殊な立ち位置の艦娘なのでいたしかたないであろう。

でもでも、司令官さんが傍にいるだけで電は百人かなのです！」

電「色々本とが読んできたけど、初めてなので色々不安なのです。」

そして出産日。陣痛の周期が短くなってきたので電は施設のベッドに座らせられ、来たるべき2世の誕生を暫し待った。

00:05.35

3...2...1...  ...1...2...3







● REC

HD 1080 60FPS  99%

01:35:41

3...2...1...  ...1...2...3





● REC

HD

1080 60FPS

99%

ふーッ

ふーッ

ニャッ

ニャッ

01:35:41

3...2...1... 1...2...3



陣痛の周期が短くなる「ジュッ」

電の顔が少しずつ険しくなっていた。

子供を産み出すために子宮が収縮し始めているからだ。

ふーッ

ふーッ

ニキッ

ニキッ

しばらくすると、電の秘部から

子供の頭頂部が顔をのぞかせ始めた。

僕の心も不安と期待で一杯になっていた。

● REC

HD

1080 60FPS

99%

ふーッ

ふーッ

ニキッ

ニキッ

しばらくすると、電の秘部から  
子供の頭頂部が顔をのぞかせ始めた。  
僕の心も不安と期待で一杯になっていた。

陣痛の周期が短くなるにつれて  
電の顔が少しずつ険しくなっていた。  
子供を産み出すために子宮が収縮し始めているからだ。

01:35:41

3...2...1... 1...2...3





● REC

HD 1080 60FPS  99%



02:20:15

3...2...1...  ...1...2...3







フイッ  
フイッ  
フイッ

ニャッ  
ニャッ  
ニャッ  
ニャッ  
ニャッ

ぐぐぐ  
ぐぐぐ  
ぐぐぐ  
...

● REC

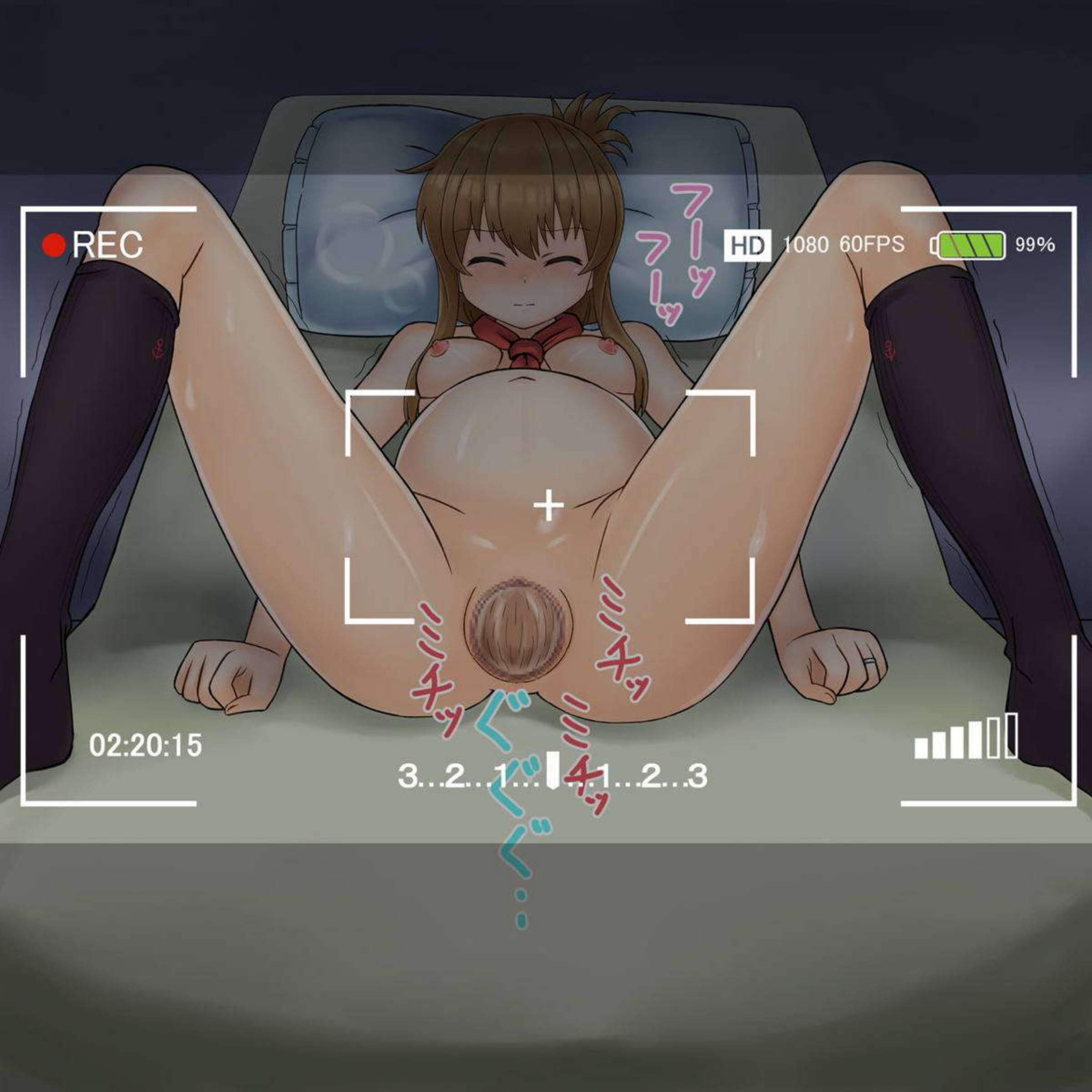
HD

1080 60FPS

99%

02:20:15

3...2...1... 4 1...2...3



その面積は次第に大きくなり、同時に電も苦痛に満ちた表情になっていった。ラマーズ法の呼吸をしつつ、下腹部に力を入れさせる。

フーッ  
フーッ

ニチッ  
ニチッ  
ぐぐぐぐ…  
ニチッ  
ニチッ

こういう時の全ては電だのみだ。

僕の出来ることといえば電の傍にいてやり、電を励ましてあげるしか無い。

それでもせいぜいこの瞬間に立ち会っただけ  
電とどうしては心強〜、頑張れるのだろう。

● REC

それでもいっくら瞬間に立ち会っただけ  
電圧としては心強く、頑張れるのだろう。

02:20:15

こういう時の全ては電だのみだ。  
僕の出来ることといえば電の傍にいてやり、  
電を励ましてあげるしか無い。

フーッ  
フーッ

HD 1080 60FPS  99%

その面積は次第に大きくなり、  
同時に電も苦痛に満ちた表情になっていった。  
ラマーズ法の呼吸をしつつ、下腹部に力を入れさせる。



ニチッ  
ニチッ

3...2...1......1...2...3

ぐぐぐ  
ぐぐぐ



● REC

HD 1080 60FPS  99%



02:35:51

3...2...1...  ...1...2...3





● REC

フ  
ィ  
ッ

HD

1080 60FPS

99%



02:35:51

3...2...1... ▾ ...1...2...3

ぐ  
ぐ  
ぐ





やがて電の股間から2世の頭が  
完全に顔をのぞかせた。

フーッ  
フーッ

ぐぐぐ...

ひとつの母体の中に宿っていた生命が、  
やがて生まれ出て別個の存在になっていくこの過程は  
何とも不思議な気分させられた。



● REC

ひとつの母体の中に宿っていた生命が、  
やがて生まれ出て別個の存在になっていく  
この過程は  
何とも不思議な気分させられた。

フ  
ー  
ッ  
フ  
ー  
ッ

HD

1080 60FPS

99%

やがて電の股間から2世の頭が  
完全に顔をのぞかせた。

02:35:51

3...2...1... 1...2...3

ぐ  
ぐ  
ぐ





● REC

HD 1080 60FPS  99%

02:40:12

3...2...1...  ...1...2...3





はッ

はッ  
はッ

ズズズ...

● REC

はッ  
はッ

はッ  
はッ

HD

1080 60FPS

99%



ズ  
ズ  
ズ  
ズ

3...2...1...1...2...3

02:40:12



体を捻りながら子供の上半身が出てきた。

ズズズ...

はッ  
はッ

はッ  
はッ

出産時は子供の頭の直径が一番大きいため、  
1111を過わねばあつは早い。  
あつもつ少した。

● REC

HD 1080 60FPS 99%

出産時は子供の頭の直径が一番大きいため、  
1111を過ぎてはあつは早い。  
あつは早い。

体を捻りながら子供の上半身が出てきた。

はッ

はッ  
はッ

ズズズ

02:40:12

3...2...1... 1...2...3





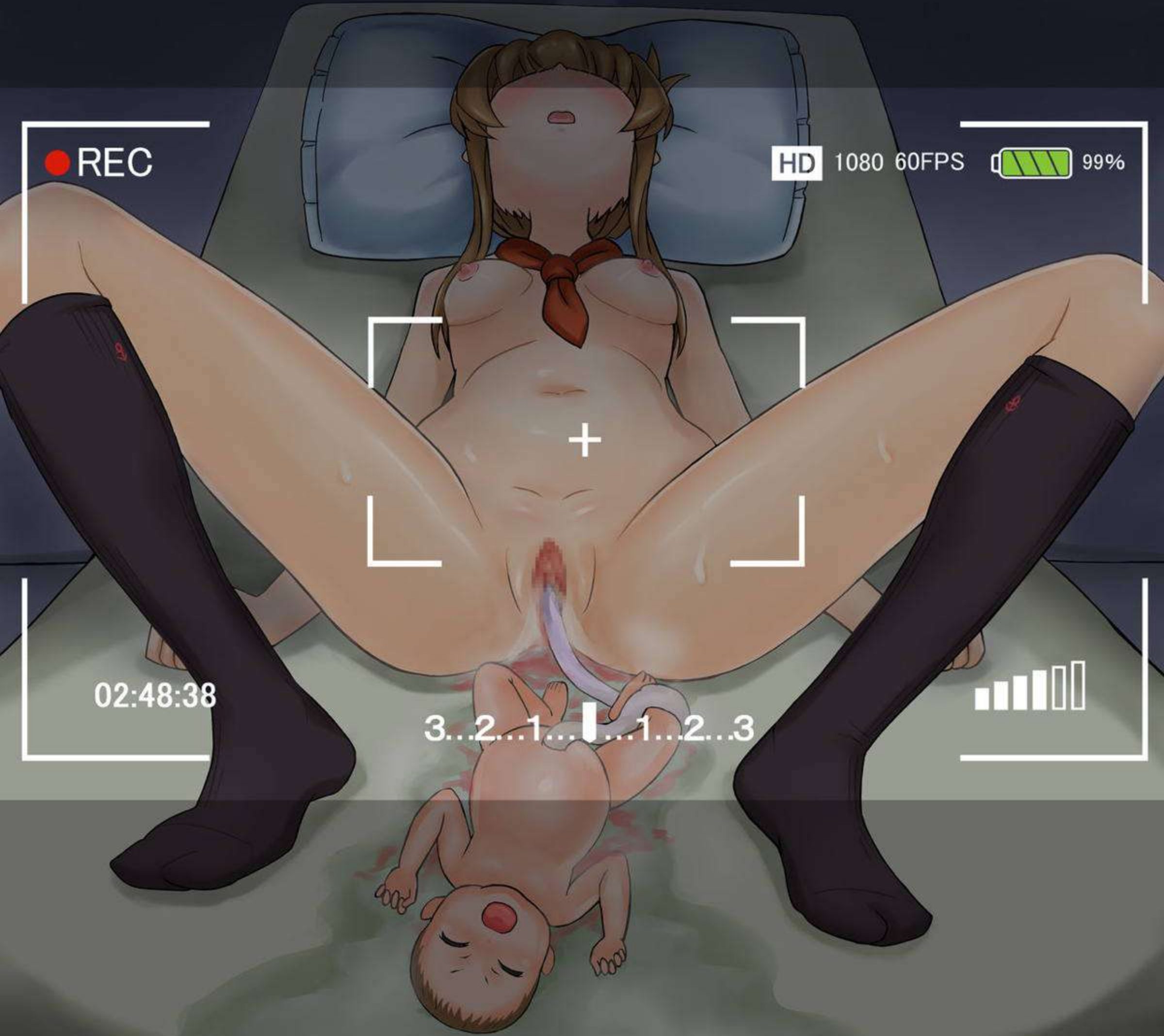


● REC

HD 1080 60FPS  99%

02:48:38

3...2...1...  ...1...2...3



● REC

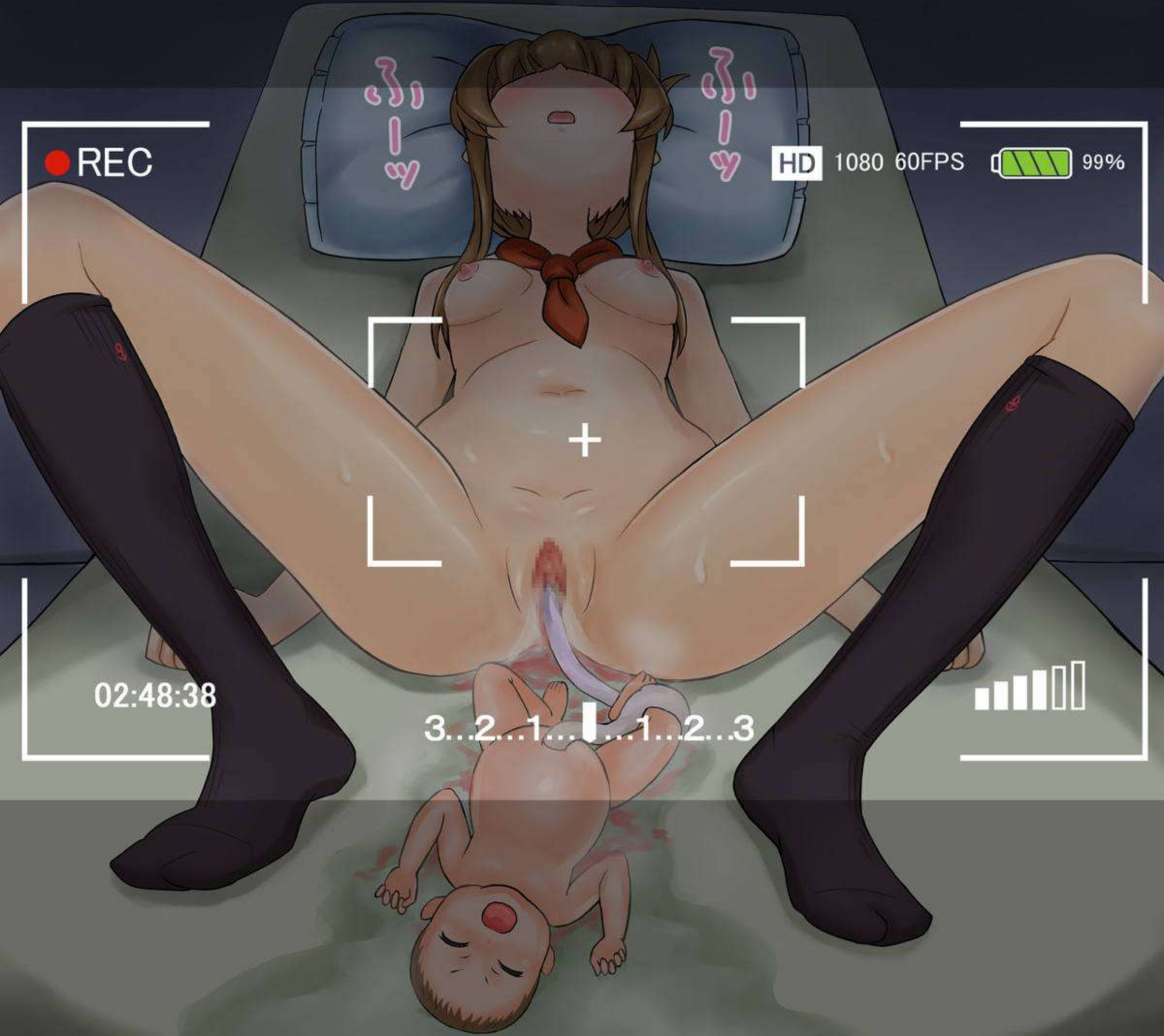
HD

1080 60FPS

99%

02:48:38

3...2...1... 1...2...3





心身ともに何も問題ないようだ。よかった。

無事電は赤ん坊を生み出した。女の子だった。

● REC

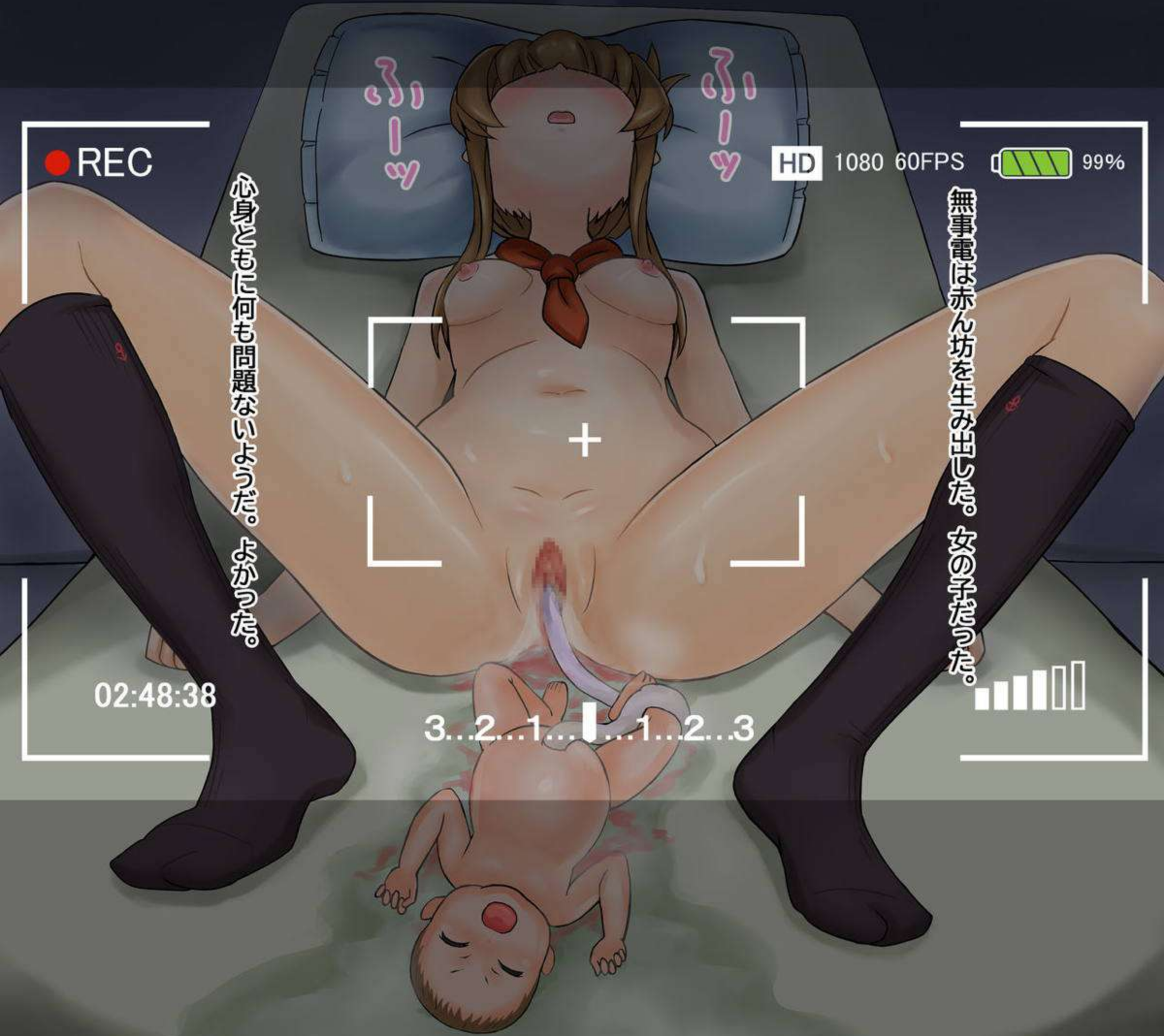
HD 1080 60FPS 99%

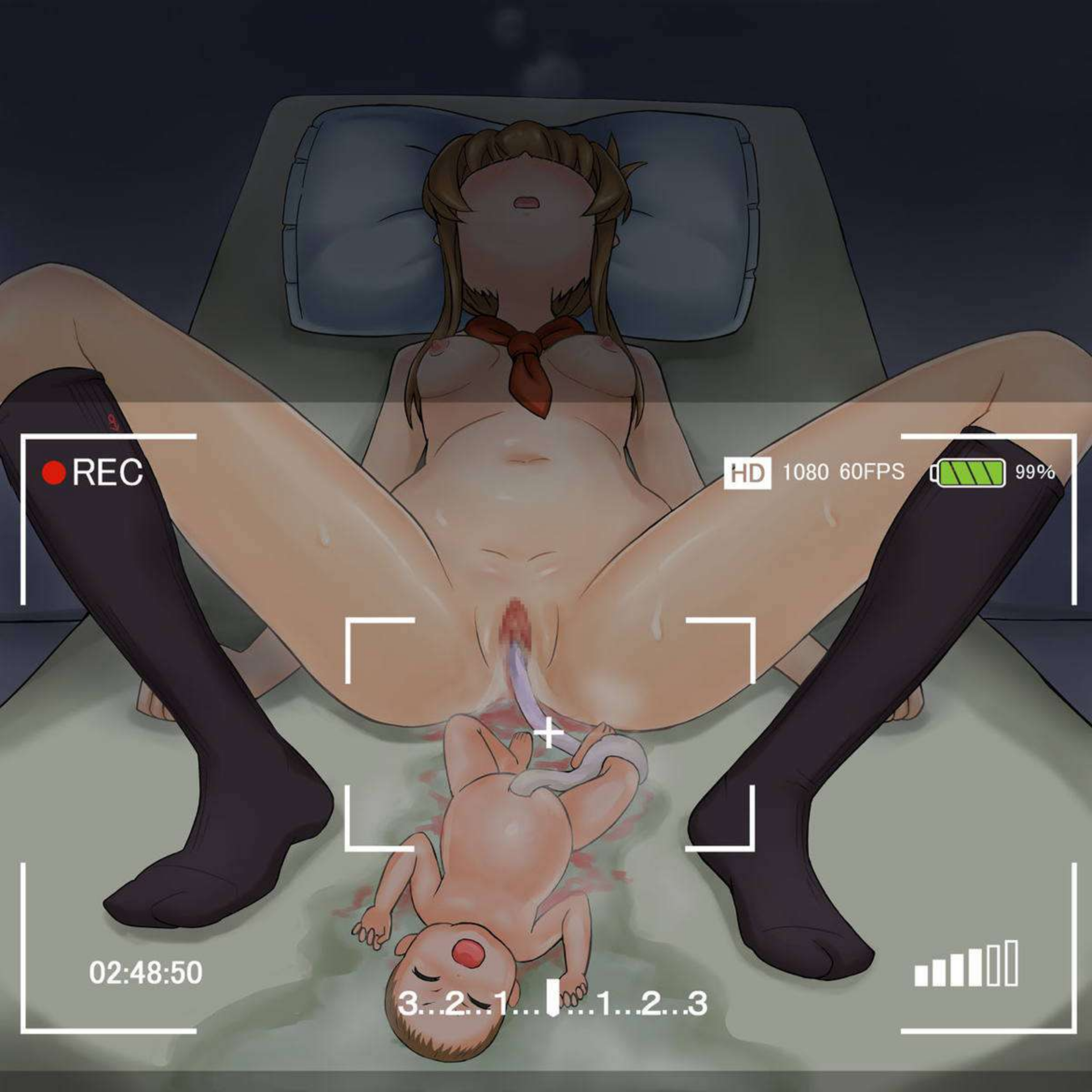
心身ともに何も問題ないようだ。よかった。

無事電は赤ん坊を生み出した。女の子だった。

02:48:38

3...2...1... 1...2...3





● REC

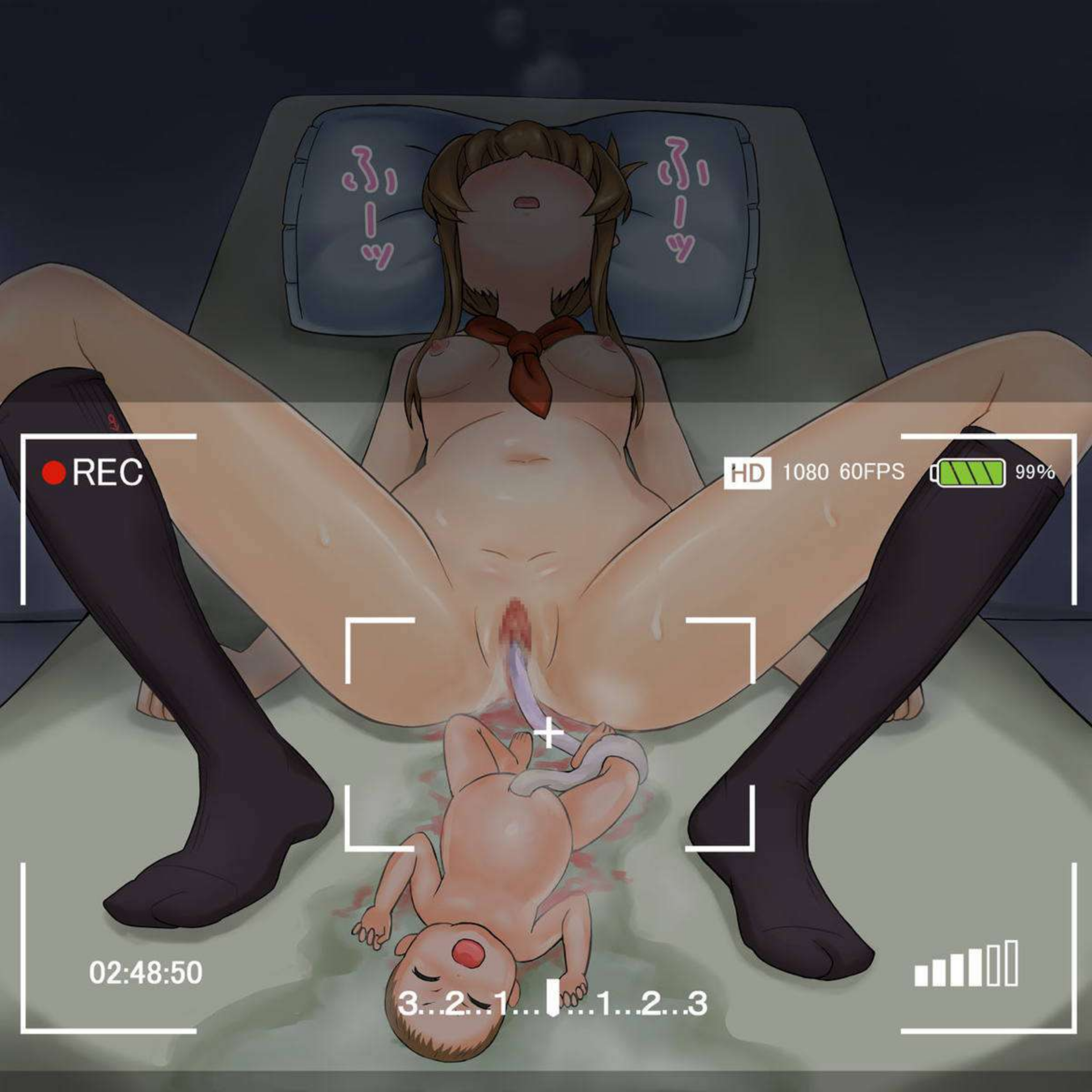
HD 1080 60FPS

99%

02:48:50

3...2...1...1...2...3





ふー  
ー  
ッ

+

+

● REC

HD 1080 60FPS  99%

02:48:50

3...2...1...  ...1...2...3





電に感謝するとともに、  
自分の願望が具現化した喜びに  
ただただ今は浸りたかった。



ふー  
ー  
ッ

ふー  
ー  
ッ

● REC

HD 1080 60FPS  99%

電に感謝するとともに、  
自分の願望が具現化した喜びに  
ただただ今は浸りたかった。

02:48:50

3...2...1...  ...1...2...3







無事に出産を終え、ひと月半ほど育児と電の体調回復を待ちつつある新緑の晴れた日、電と娘で一緒に外に出た。

そこにいた電は少女の電だけでなく、母性に目覚めた母親としての電の姿があった。

電「この娘が電の跡を継ぐのです。」

新たな歴史の始まりなのです」

自分と電の遺伝子を兼ね備えた新たな生命。

自分の願望が具現化したその生命は、自分の心身を充実させるに十二分なものだった。





それから十数年後、2代目になった娘の電は次世代の就任式(進水式)を終えた。深海棲艦と命の駆け引きをするのが艦娘の運命とはいえ、父親となった僕の心中も正直穏やかではない。

母親となった電は、母親らしい貫禄も出てきてはいたが、基本的な性格はあの時から全く変わっていない。

電「はわわわわ、最近の艦装はこうなっているのですか！お母さんの頃とだいぶ違うのです！」

娘の電は母電に似ていてドジなどころもあるが、

基本母親よりしつかりしているのでそのへんの心配はない、多分。

しかしながら相手を思いやる母親の精神はしつかり受け継がれているのが、

僕の娘としての最大の誇りでもあった。

